

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21700636

研究課題名（和文） 近現代日本におけるスポーツナショナリズムの研究

研究課題名（英文） Sports Nationalism in Modern Japanese Society

研究代表者

権 学俊 (KWON HAK JUN)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：20381650

研究成果の概要（和文）：

本研究は近現代日本におけるスポーツ・ナショナリズムの解明を目的とし3年間スポーツ・ナショナリズムを「支配・管理」「統制」「同和」「排除」「抵抗」という側面から検討した。本研究を通して、戦前スポーツイベントが天皇制と国家的な秩序への同意を強化し、国家との一体感を推し進める装置として巧みに機能した点、戦後天皇・皇族が様々なスポーツ大会と関わりながら、「象徴天皇制」「大衆天皇制」の基盤強化を図るとともに、国民との距離を縮め新しい皇室像をアピールしていったことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

I have conducted a study on sports nationalism in modern Japanese society for three years, trying to figure out sports nationalism from the perspective of governance, discipline, antidiscrimination, elimination, and rebellion. This study shows that sports related events prior to the Second World War contributed to making people believe in the imperial system strongly, and that these events played an important role as a device to make people feel a sense of belonging to the nation. In addition it became clear that these events contributed to enhancing the base of both a symbolic and a populist imperial regime, as well as aiming towards a new image of the imperial household which narrowed the gap between the emperor and the nation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：社会学、ナショナリズム、国民統合、スポーツ、近現代日本、天皇制、身体

## 1. 研究開始当初の背景

(1) どんな国でも、それぞれの仕方で「国民統合」機能を果たすものを持つ。人々の間で、

あるレベルの合意を形成し、そうした合意をつなげて、比較的に小さい集団から大きい集

団へと、まとまりを作り上げていく「国民統合」を果たすものは多様に存在し、それぞれがうまく機能を分担し合って、一つのシステムを作り上げている。日本の憲法が「国民統合の象徴」としている天皇が頂点として、元号、日の丸・君が代などがその機能を果たす制度である。

しかし、この他に様々なレベルで国民統合作用を営んでいるものが、有象無象あるに違いない。日本人の意識を一点に集中させることのできる制度・行事・イベントを挙げると、その全てを網羅することはできないが、その中でも、スポーツイベントほど大衆の関心と呼び、注目を集める社会現象はないと思われる。スポーツイベントはよりリアルな目、より合理的な判断力を一時停止させ、壮大なドラマの中に国民のすべてを吸収してしまう不思議な力を持っている。だから、スポーツ活動の裏には陰に陽に常に政治の影がつきまわっているし、これまでいろいろな形で「政治」に利用されてきた。スポーツはナショナリズム高揚の手段として使われ、ある個人やチーム、地方、企業、学校、国家など、同じ集団に所属している構成員にプライドを持たせ、集団の共同体意識の向上や統合に大きく貢献してきた。今日、多くのスポーツイベントの人気の人々のナショナリズム感情と深い結びつきを持っていることはあまりに明白である。少なくともナショナリズムを人々の気分のなかにすでに存在している感情と考えるなら、多くのスポーツの人気のそうしたナショナリズムに支えられ、また、そうしたスポーツへの関与を通じて膨大なスポーツ観客たちのナショナリズムにエネルギーが注入されていることはあまりにも明白な事柄であるように見える。

(2) しかしながら、日本におけるナショナリズム研究の側、スポーツ研究の側からこの問

題を眺めてみても、スポーツとナショナリズムについて正面から総合的に考察した研究はない。とりわけスポーツイベントの社会機能に関しては、そのグローバルな影響力にもかかわらず、研究蓄積は浅く、いわゆる cultural studies におけるスポーツ儀礼の研究と歴史研究との理論的懸隔も大きい。単に伝統的共同感情の喚起という機能にとどまらぬ複雑な統合メカニズムを備えたスポーツイベントの包括的研究は、その意味で、緒についたばかりだと言える。現代日本においても、運動会や高校野球等の特徴的スポーツイベントが果たしている社会統合メカニズムについて体系立てられた検討が必要であるが、いまだ包括的研究がなされているとは言い難い。

海外におけるナショナリズムをめぐる多くの研究でも、スポーツとナショナリズムの関係についてはほとんど触れていない。ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』で強調されたのは、出版資本主義を通じたナショナルな言語的統一であり、身体文化とナショナリズムの関係は後景に退かされていた。アーネスト・ゲルナーやアンソニー・スミスらのナショナリズム論でもスポーツとナショナリズムの関係について正面から論じられたことは少ない。スポーツ研究の側からこの問題を眺めてみても同じである。エリアスのスポーツ論でも、ジョン・ハーグリーヴズでも、ナショナリズムに関しては、メディア・イベント化されたスポーツの中での擬似的なアイデンティティが論じられる際に部分的に言及されているにすぎない。

(3) 私はこれまで戦後日本の特異なスポーツイベントである国民体育大会に関する研究を続けてきた。国民体育大会については、単純なスポーツイベントとして日本スポーツの普及・振興に大きく貢献してきたと評価

が多い。しかし、戦後日本社会における象徴天皇制の公認と浸透を増幅させる装置としての国民統合機能、県民を巻き込む地域社会統合の機能、様々な競技施設・道路建設などの開発主義的な役割、自衛隊と「日の丸・君が代」の宣伝強化、県民運動展開等、戦後日本社会を語るうえで重大な政治的意味を持っていることも、また無視できない事実である。このような成果に基づいて、近・現代日本社会にまで「足のばし」して、近・現代日本におけるスポーツ・ナショナリズムの全体像を明らかにしようと本研究に取り組んだのである。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、従来社会学、スポーツ社会学研究で充分検討が行われていなかったスポーツ・ナショナリズムに迫り、近代から現代にいたる長い歴史的なスパンの中で日本人の歴史と因縁の深い日本のスポーツイベントに焦点を当て、スポーツとナショナリズムとの進行過程を政治学、歴史社会学、メディア論を含んだ複合的な視点を持ち込んで、近・現代日本のスポーツ・ナショナリズムを実証的・総合的に解明することにある。

(2) 本研究は近現代日本におけるスポーツ・ナショナリズムの解明を目的とし、①その歴史的な性格を踏まえ、②戦後諸時期における国民動員の特質をあきらかにするために、③近現代日本社会のスポーツイベント、明治神宮体育大会、東京六大学野球リーグ、極東選手権大会、国民体育大会、東西対抗サッカー大会や新憲法施行記念都民体育大会、東京・札幌・長野オリンピック、各地域の運動会、高校野球などのスポーツイベントを分析して、④韓国におけるスポーツ・ナショナリズムのあり方と比較した日本のスポーツ動員の特質を検討した。

3年間の研究を通じて、①スポーツ史のみならず歴史社会的アプローチをふくめたアプローチ法を確立した上で、②戦前、戦後スポーツイベントに関する基礎的資料の収集と分析を行い、③オリンピックにおける国民動員の検討を行うとともに、運動会、高校野球に関するケース・スタディを分析した。(3) 特に、本研究は社会的影響力をますます強めているスポーツと「天皇制」との関わりに焦点を当てて日本社会の特質、近・現代日本社会の国民意識の変動を明らかにした。

さらに、韓国におけるスポーツ動員の特質について、「抵抗ナショナリズム」としての特質を検証した。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は、近現代日本と植民地朝鮮におけるスポーツとナショナリズム（天皇制）との関わりを国民統合・地域統合に適した象徴儀礼、地域政治の力学、スポーツ史上の位置、大衆動員のメカニズム、天皇制強化の一翼としてのスポーツ位置等々にわたる分析を通じて、近現代日本の社会的特質を浮き彫りにするところにある。

この研究は近現代日本におけるスポーツとナショナリズム（天皇制）との関係を解明するため、①天皇制とスポーツとの関わりに関する分析を通して、近現代日本社会における社会的特質と国民意識を明らかにし、②近現代日本社会のスポーツイベントの分析や相撲・柔道・野球・サッカー・テニス・剣道等各種目と天皇制との関わりについて分析、③近現代日本社会における天皇制とスポーツの歴史的意味、天皇制においてスポーツはどのような機能と役割を果たしたのか、皇族のスポーツ関与はどのような効果を取めたのか、④内地国民（日本国民）・外地国民（植民地国民）はそれをいかに（どのように）受容（受け入れた）したのか、民衆側の受容の

諸力学を析出する。つまり、国家と民衆との緊張関係(同意、逸脱、抵抗など)を検討する。また、⑤旧「大日本帝国」(植民地朝鮮、台湾等)のスポーツイベントの分析と近代日本スポーツイベントを対比する。これらを通じ、天皇制におけるスポーツ、スポーツにおける天皇制において、何が見落とされてきたのかを分析した。

(2)本研究は、スポーツイベントのような大衆的象徴儀礼が果たす社会統合・国民統合の極めて特徴的な機能を、天皇制との関わりを通して歴史的に究明する学際的アプローチである。あくまで実証的な検討に拠りながら、個々の事例研究に尽きない、スポーツとナショナリズム研究、天皇制研究、国民統合研究を歴史的パースペクティブを備えて遂行された。特に近現代日本社会における天皇制とスポーツとの関わりのみならず、帝国日本が長年支配した朝鮮等を研究対象とし、それぞれの地域の国家機関、資料館、図書館、公文書館で関連資料(朝鮮総督府や台湾総督府の機関紙、地元新聞、議会記録等)を収集するほか、各国の天皇制やスポーツ史関連研究者にインタビューを行った。近代を貫いて現在にいたるまで続く天皇制とスポーツの包括的分析はそうしたアプローチなくしては解明されないと考えられる。

(3)本研究では、これまで多くの研究からみられた権力装置としてのスポーツが「支配の道具」としてどのように機能したのかを究明(国家側分析)するとともに、スポーツがどのように民衆に受け入れられたのか、つまり民衆の要求を媒介として自己表現、あるいは主体を形成する場でもあることに留意しながら、研究を進めている(国民側からの分析)。

#### 4. 研究成果

(1) 近現代日本社会で社会的に影響力の強い天皇制とスポーツとの分析を通じたナショナリズムの検討は、単にナショナリズムの理論研究にとどまらぬ社会分析として、日本社会の社会的特質を明らかにするうえで大きな意義を持つ。また、現代的な社会統合の一環を担うナショナリズムの機能に関する天皇制とスポーツを通じたナショナルな統合機能に関する研究成果が少ないことに鑑み、研究としての先進性、独創性も大きい。

本研究を通して、戦前スポーツイベントが天皇制と国家的な秩序への同意を強化し、国家との一体感を推し進める装置として巧みに機能していったことが明らかになったが、それはスポーツ大会における天皇・皇族による優勝カップ下賜、各競技団体への下賜金授与や大日章旗下賜、1924年明治神宮競技大会の設立と支援、台覧競技参加等、皇太子裕仁(昭和天皇)をはじめとする皇族・皇室によるスポーツ支援・活動によって果されていたことが本研究を通して明らかになった。

(2) 戦後にもGHQ占領下における「東西対抗サッカー大会」や「新憲法施行記念都民体育大会」の支援、戦時下返納していた天皇杯の再下賜や積極的普及、大相撲・野球の天覧試合観戦等、「象徴天皇制」を強化するためにスポーツが利用された点を見逃すわけにはいかない。また、昭和天皇のみならず、多くの皇族がスポーツ協会・連盟の総裁として活動していた。(秩父宮-陸上連盟、ラグビー協会、賀陽宮-軟式野球協会)。さらに、国民体育大会が昭和天皇・皇族と深く関わりを持ちながら、純粋なスポーツ大会としての性格から逸脱し、戦後日本社会における「象徴天皇制の公認と浸透」を増幅させる装置として、戦後政治のうえに重大な意味をもたらしてきたことも、また無視できない事実であり、

東京オリンピック・札幌オリンピック・長野オリンピック等にも深く関わっている。このように天皇・皇族は様々なスポーツ大会と関わりながら、「象徴天皇制」「大衆天皇制」の基盤強化を図るとともに、国民の距離を縮め新しい皇室像をアピールしていったことが本研究を通して明らかになった。また、ナショナル・イベントとしてのオリンピック、ローカル・イベントとしての運動会及び特異なスポーツイベントである高校野球の検討から、これまで未解明であったスポーツ動員の性格と機能を解明することができた。

(3) 旧「大日本帝国」の外地であった朝鮮、台湾、インドネシア、シンガポール等では、様々なスポーツイベントが開催されたが(特に朝鮮、台湾)、皇族たちがそれらのイベントを訪問・支援していることについては、ほとんど知られていない。研究期間中、韓国を数回訪問し、植民地時代のスポーツと皇族とのかかわりについて、朝鮮総督府の機関紙、地元新聞等関連資料を韓国の中央省庁をはじめ、国会図書館、公文書館で収集できたことは大きな成果である。

特に、帝国日本が植民地支配に「順応」する近代的身体を形成するため、植民地朝鮮で行った

①学校を中心として行われた体力章検定や体操科、学校教練、運動会、集団体操、②一般国民を対象として行われた厚生・健民運動や皇国臣民体操、朝鮮神宮体育大会、徴兵制などの身体政策を分析して、③近代日本における身体管理や国民づくりのあり方と比較し、植民地朝鮮における身体規律と動員の特質を明らかにした。この分析を通して、植民地朝鮮における医療・衛生問題、身体規律と健康の問題、身体の歴史性や近代的身体につ

いて明らかにした。この問題を検討することによって、強化された身体の規律化が植民地民衆の身体・精神にどのような刻印を残したか、これらの問題を明らかにした上で、身体が持つ歴史性と社会性、身体の国民化、身体と植民地支配との関係を究明しようと試みた。

「近代化」「文明化」そして「同化」などのイデオロギーの下で朝鮮人の生活や文化といった領域で形成された身体管理や権力関係を解明すること、日本が植民地朝鮮に持ち込んだ「近代」は日本にとって同時代性を帯びるものであることを明確にしつつ、日本の歴史的なあり方を問い直すこと、そして日本の植民地主義に独特の色合いを帯びさせた天皇制イデオロギーの問題を再考することが本研究の大きな目標・課題であった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 著者名: 権 学俊、論文標題: 戦後自衛隊の国民宣伝活動に関する一考察、雑誌名: 日本語文学、査読: 有、53 巻、発行年: 2011、ページ: 443-466
- ② 著者名: 権 学俊、論文標題: 近代日本における「国民」形成と兵式体操に関する一考察、雑誌名: 日本語文学、査読: 有、49 巻、発行年: 2010、ページ: 385-406
- ③ 著者名: 権 学俊、論文標題: 国民体育大会の研究における論点と課題、雑誌名: スポーツ社会学研究、査読: 無、18 巻 1 号、発行年: 2010、ページ: 98-101
- ④ 著者名: 権 学俊、論文標題: スポーツとナショナリズム、その親和性を問う、雑誌名: 現代スポーツ評論、査読: 無、23 号、発行年 2010 年、ページ: 82 - 91
- ⑤ 著者名: 権 学俊、論文標題: 日本の大国化とネオナショナリズムに関する一考察、雑誌名: 日本語文学、査読: 有、47 巻、発行年: 2009、ページ: 297 - 326
- ⑥ 著者名: 権 学俊、論文標題: 国家権力装置としての国民体育大会に関する一考察、雑誌名: 日本文化研究、査読: 有、32 巻、発行年: 2009、ページ 25 - 44

- ⑦ 著者名:権 学俊、論文標題:戦時期日本における「幻の東京オリンピック」の祝祭性と政治性に関する考察、雑誌名:日本学研究、査読:有、28巻、発行年2009、ページ:329-350
- ⑧ 著者名:権 学俊、論文標題:近代日本のラジオ体操と「身体」の政治、雑誌名:日本語文学、査読:有、45巻、発行年2009、ページ:457-478

[学会発表] (計 0件)

[図書] (計 2件)

- ① 著者名:権 学俊、出版社名:文理閣、書名:「戦時下植民地朝鮮における身体管理と規律化に関する一考察」『現代スポーツ論の射程－歴史・理論・科学』、発行年2011、総ページ数:420ページ(pp.68-94担当)
- ② 著者名:権 学俊、出版社名:国民体育振興公団、書名:「日本国民体育大会」『全国体育大会の改善法案に関する研究』、発行年2010、総ページ数:157ページ(pp.70-82担当)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0件)

○取得状況 (計 0件)

[その他]

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

権 学俊 (KWON HAKJUN)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号:20381650